「日の丸」の重み感じた

ラクロス世界選手権日本代表

小澤 徹也選手

ラクロスの男子世界選手権に中央大学の小澤徹也選手（商4）が出場した。現役学生選手の参加は中大史上初めて。世界のトップレベルを知った中大のエースが大きく成長した。

写真提供＝日本ラクロス協会

第12回男子世界選手権は米国デンバーで7月10日から19日まで行われた。38カ国・地域が参加。日本はカナダ、米国、豪州など6チームのトップグループに入り、2勝6敗、総合8位ながらアジアから唯一、このグループに参戦した日本の底力を存分に示した。

心

「日の丸」を付けた戦いは、出発前から始まっていた。小澤選手が述懐する。

「候補選手から代表選手が選ばれていきます。招集の段階で日本代表としてのチームづくりを意識させられました。代表メンバーが決定してからチームをつくるのでは遅いとの判断でした」

学生が社会人のなかに入っていくと、遠慮してしまい、コミュニケーションが取れないことがある。当然、自己アピールもできない。代表経験のある社会人選手の一人が、小澤選手ら学生によく声をかけていた。代表チームとして一つになるよう働きかけていたのだ。

小澤選手は思った。「社会人の選手は勤務先や家庭から理解を得て、ラクロスを続けています。理解を得るのは大変だろうし、練習だって思うようにはいかないでしょう。プレーにかける意気込みが違いました。日の丸を付けるということは結果を求められますからね」

自らの環境と比べると頭が下がる。この日を境に練習にいっそう身が入った。昨年6月、22歳以下による「第6回アジア・パシフィック選手権」（中国）の日本代表に中大の中澤寛先輩（当時、文4）とともに選ばれ、優勝に貢献した。素晴らしい経験だった。今回、日本代表チームに参加して、より高いレベルのチームづくりに驚いた。

中澤寛先輩

技

「外国勢はクロスの扱いがうまい。高い技術を見ました。シュートは速くて、ボールにスピードがあります。プレーは個の力が強くて、一人ひとりが上手。そうしたプレーが続いていく、高いレベルの連携を感じました」

体

大きな体の外国人選手とたえず接触する世界選手権で自信を得た。「1対1のプレーで当たり負けすることはありましたが、日本選手は瞬発力があり、体力がありました。僕自身もそんなに劣ってはいないと思いました」

第1戦の相手は強豪の豪州。延長に入り、延長前半、同後半も決着がつかずにサドンデスに入った。1点取れば勝利するが、13−14で敗れた。

「落ち込んでいるとき、スタンドから拍手が起きて、それが鳴りやまない。深夜の時間帯です。僕たちを称えていると分かって、鳥肌がたちました。あの拍手、心にしみましたね」「日本人は真面目だからいつも一生懸命にプレーしますよね」

豪州にこれでもかと食らいついていった日本の粘り強さが、ラクロスの盛んな米国ファンに高く評価された。イングランドとの第5戦は延長の末13−12で競り勝った。

後日、小澤選手らが町歩きをしていると少年からサインを求められた。「僕らがラクロスの選手と知っていました。サインはアメリカでは珍しいだろうと漢字で書きました」

大会期間中はデンバー大学の学生寮に入った。小澤選手は先輩と2人1部屋。食事は大学のカフェテリアでとった。「ステーキ、ハンバーガー、ポテト、ピザ、サラダと初めのうちはそれが目にも新鮮でよかったんです」。毎日同じような食事の繰り返しでやや食傷気味になったとき、差し入れがあった。「お茶漬けと梅干がおいしくて。すごくおいしかった」。小袋に入ったおなじみのお茶漬け海苔。無菌パック入りのごはん。「1食それだけのときもありましたが、満足しました」

街ではギンザ・スシ・グリルという店に仲間と入った。「1貫2ドル50セント。高いけれど日本と同じ味。なべ焼きうどんもありました」

ラクロスの高いレベルを肌で感じ、アメリカを楽しんだ。

下級生のとき、4年生に22歳以下・日本代表チーム入りした選手がいた。2012年卒業の遠藤竜郎選手（商）だ。「その先輩のプレーをずっと見ていました」

ミッドフィルダーで積極果敢にプレーした小澤選手

小澤選手もアジア・パシフィック選手権から帰国した昨年夏以降、中大部員から熱視線を浴びた。今回グレードアップした「日の丸」選手は大目標として見つめられている。

中大のエースはジャパンで5得点した。「世界で学んだことはチームに還元していきます」。同じ内容のアドバイスでも「日の丸」を付けた選手の言葉には重みがあるという。

中大ラクロス部にジャパンの血が流れている。

太陽光線を減らすアイブラックをつけ、精かんさが際立つ小澤選手

もっと知りたい

■世界選手権決勝
カナダ　8−5　米国
両国は1978年決勝で激突して以降8度顔を合わせ、カナダの3勝5敗。世界選手権は4年に1度の開催。

■今大会最終順位
①カナダ　②米国
③イコライ・ナショナルズ
④豪州　⑤イングランド
⑥スコットランド　⑦イスラエル
⑧日本　⑨ドイツ
⑩アイルランド

■中大選手のW杯出場
2002年W杯に佐藤英明選手（中大商卒）が、クラブチーム所属として出場した。中大史上初のW杯出場となった。

学生記者になりませんか?

『HAKUMON Chuo』は中大生が取材・編集する大学広報誌です。
現在、学部在学生を対象に学生記者を募集しています。

学生記者の取材現場

●元新聞記者のプロや先輩の学生記者に、取材方法・原稿の書き方はじめ添削指導を基礎から受けることができます。将来どんなキャリアをめざすにも文章力が重要です!

●取材を通して、さまざまな人に出会うことができます。出会いの数ほど思い出ができることでしょう。

●記者活動を通してコミュニケーション能力など「社会人基礎力」を身につけることができます。

お申し込み・お問い合わせ　中央大学広報室『HAKUMON Chuo』　編集担当：久保田茂信
Phone：042-674-2048（直通）
E-mail：skubota@tamajs.chuo-u.ac.jp